

# 助言談話における結束性

阿部圭子

## I. はじめに

言語の最小単位はいうまでもなく語である。この語と語の組み合わせや連結によって文が形成される。そうして、語と語の組み合わせや連結についての規則を司るのが文法であり、文を研究するには、まずこの文法を手掛かりにするのである。さらに言語は、文だけで成り立っている訳ではない。文と文の組み合わせによる一繋がりのもとまり、これを談話と呼んでいるが、通常言語によるコミュニケーションはこの談話によってなされている場合が多い。

本研究の目的は、この談話を取り上げ、談話におけるある種の法則性を見出すことを試みる。すなわち文に文法があるように、談話にも談話法といったものがあって然るべきであるとの仮定のもとに、何らかの法則性を見出そうとするものである。

今回はそのための研究対象として、ラジオの人生相談番組による助言談話を取り上げる。助言談話を研究対象とするのは相談者が悩みや問題を提示し、それに対し回答者が助言を与えるという西欧英語圏と東洋非英語圏に共通の基本的な枠組みを持つからである。また助言談話は単なる自然発話に比べて、談話にある種の法則性があるので、分析がしやすいと考えられる。

助言談話には、人生相談のほかに階級性と言語的レジスター分析を中心とする医療談話や法的思考分析を中心とする法廷談話、さらにはビジネス談話などの専門分化したものがある。しかしながら、これらの談話ではそれぞれ、医療のルール、法律のルール、ビジネスのルールなどの専門分野における規範や規則性が優先することから、人々の日常の言語使用を人間の認知的・社会的・文化的側面との関わりという観点から見ると、その特徴や差異が判りにくい。それに比べるとラジオの人生相談という助言談話は、相談者が相談し回答者が回答するという大きなルールはあるものの、相談内容は多岐に渡り自然発話的要素が多い。それは、語用論的考え方が発話の含意や推意を研究するために文に場面や状況を加えた発話、すなわちコンテキストを重視し、人々の相互理解の過程の探求を目的とするならば、助言談話はまさに情報伝達上の機能と使用場面が共通であり、普遍的原理を明らかにするのにふさわしい談話となる可能性が高い。

すなわち本研究で助言談話を取り上げる理由は、助言談話を構成するゲームの大枠の

ルールが決まっているので、自然談話に比べ談話の方向性が拡散しないことと、ゲームのルールがほぼ日米とも同等であろうこと、さらには、日米に限らずユニバーサルな広がりを持っていることが挙げられる。

## Ⅱ. 助言談話の何に注目するか

ここでは研究の焦点を助言談話のどこに置くかについて考えてみたい。

助言談話は、相談者が悩みを打ち明け、回答者がどうしたら良いかの助言を与え、相談者はそこに一条の光を見出し終わる場合と、検討違いの助言に悲観して終わる場合がある。

この中で、回答者は、相談者の悩みの核心を見抜き、それに対する的確な回答を求められる。今回使用するデータはラジオ番組での助言談話であるため回答者は自らの名声や名誉をかけて、よりの確な回答を出さざるを得ない。そして、この的確な回答を提示するためには、相談者の悩みの核心が何かを、間違うことなく把握しなければならない。

一方、悩み相談においては、相談者がすく的確に自分の悩みを提示してくるとは限らない。コミュニケーションの技量が劣っている場合や、やはり悩みだけに最初から核心部分が話せないといった理由で回答者はその核心を推論せざるを得ない。この推論過程や推論方法にどうやら日米の違いがあるように思われる。

従って、この推論形成のあり方を仔細に分析すれば、何が日米の個別要因で、何が日米を超えたユニバーサルなものかを明らかにすることができるであろう。

何らかの法則を見つけるために、これまでに行っている日米の助言談話の研究（阿部 2004、Abe 2007）で明らかになったのは、談話を構成するいくつかの文+文=セグメントに日米共通する種類があることが判明した。すなわち、助言談話には日米共通にa,b,c,d,eの5つのセグメントが存在する。これらのセグメントはさらに研究を進めなければならないが、当面助言談話に存在するユニバーサルな構造と考えられる。そしてこれらが助言談話分析のための一つの物差しになるのではないかと推察される。

前述のこれまでの研究で助言談話における談話の流れは日米ともに次の5つのセグメント、a.悩みの提示、b.現状の把握、c.問題の所在の発見、d.助言の提示、e.納得・感謝（あるいは拒絶）による流れを持つという「ゲーム」のルールを有することが明らかになっている。以下はそれらの説明である。

### a. (相談者からの) 悩みの提示

「何でお悩みですか」という回答者の投げかけに答える形で、相談者が自分の悩みを披露し始める。

### b. 現状の把握

相談者の悩みの提示は主観的な場合が多く、回答者は周辺情報を収集し、相談者の悩

みが明示的な悩みか、あるいは、別の悩みがあり、含意的なのかなどを判断する材料に使う。

c. 問題の所在の発見

悩みの提示から現状把握により相談者の悩みがはっきりとした輪郭をおびてくる。

通常、相談者は自己中心的な場合が多いため、改めてここで、回答者は相談者に対し、正確な悩みの洗い出しと、その問題の所在を納得いく形で明らかにしていく。

回答者の回答はこの問題の所在を明確にすることで方向が定まる。

d. 助言の提示

回答者が助言を提示する。

e. (相談者の) 謝辞

通常、相談者はお礼を言い、助言談話は終了する。また納得しない場合には謝辞はなく、談話が終了する。

これまでの研究では日米の違いは、1. 談話の流れ—これら要素の並び順（どの部分が初めに来て、次にどの部分が来るかなど）、2. いつどのような発話が発せられるか（たとえば助言の提示がどこでなされるかなど）、また3. 共通の部分、たとえば「悩みの提示」「助言の提示」などにおいてどのような言語が使用されるかなどの言語的特徴、さらに4. 相談者の反応（助言について満足か不満足か）と前述の1、2、3との関連性などに日米文化による違いが見られる。

これまでの研究において明らかになった5つの要素は、それぞれ複数の文による「セグメント」として構成されている。そして、この5つの「セグメント」が様々な並び順や繋がりによって助言談話が構成されている。さらに、この5つのセグメントの並び方や繋がり方によって、助言が成功したか、あるいは失敗したか、いくつかの成功パターンと失敗パターンがあることも明らかになっている。

それではこのa,b,c,d,eのセグメントは一体どのような繋がりになっているのだろうか。この繋がり方を分析するツールとして、今回はM.A.K. Halliday (1972, 1994, 2004) の「結束性 (cohesion)」という概念に注目したい。この「結束性」をもとに分析すれば、セグメントとセグメントの繋がり存在する様々な法則性が明らかになり、それはすなわち談話法則が明らかになるということではないだろうか。

助言談話分析に「結束性」を導入する意義は、これを使ってセグメントの繋がり方を分析することであり、これによって、あるパターンが存在すれば、これが「談話法」につながる第一歩となるのではないかと考えられる。

### Ⅲ. M.A.K.Halliday (1994, 2004) の研究

M.A.K.Hallidayは、研究対象をテキストとし、その研究目的はこのテキストにおいて言

語がどのように用いられているかを理解することであった。

Hallidayの目指す「テキスト言語学」は、テキスト分析のための文法を構築することである。Hallidayの談話分析は、まず統語構造を分析し、テキストを理解すること、それは、語と語のつながりである語連結 (wording) によって意味が生み出される。そして、その意味によってコンテキストとの関係が明らかになることで、テキストを理解することに繋がる。この語と語を繋ぐ規則となるのが文法であることから、テキスト理解は、まず文法、すなわち統語論からスタートすることとなる。

そして、ある段階を過ぎると「意味的まとまり」や「話者の意図」、「情報の新旧」、「文処理のしやすさ」など、テキストそのものの解釈とともに、コンテキスト<sup>1</sup>の解釈とコンテキストとテキストとの間の有機的な関係の解釈という機能面の分析に移行する。

この分析に際しHallidayはテキストのまとまり (文以上の単位) が成立する条件として「結束性」という概念に着目した。

結束性は、あるひとまとまりのテキストが集合体として意味を持つことができる装置の役割を果たしており、それがテキストのまとまりをもたらしている。文や節の結びつきは文法規則によるものとそれ以外の規則によるものがあるが、文法規則以外の結びつきは結束性という概念で説明できる。そしてHallidayによれば結束性 (cohesion) を作り出す方法は、照応 (reference)、省略と代用 (ellipsis and substitute)、接続 (conjunction)、語彙的結束性 (lexical cohesion) の4つに分類できるとしている。

以下はそれぞれの内容の説明である。

#### A. 照応 (reference)

照応には、人称要素、指示要素、比較要素の3つが挙げられている。

まず人称代名詞による照応には、「外部照応」と「前方照応」の1人称、2人称、3人称代名詞などが分析対象になる。外部照応 (exophoric) には談話場面の人物や物体などがあり、直示的なものとして1人称、2人称のI, youは直示的な意味を有する。3人称のhe, she, it, theyも外部照応的に用いられることもあるが、前方照応的で用いられることが多い。こういった語に出会うと、聞き手はどこか別のところにその解釈を求めなければならないが、これが結果的にテキストの中の2つの部分を結びつ付けることになる。すなわち、結束性のあるまとまりを生み出すのである。

またテキスト構成 (texture) とは、結束性と構造によって決まってくる。たとえば代名詞とその照応対象が同一の節複合にある場合は構成要素である節の間の構造的関係になっている。そして結束性は、すでに出来あがったテキスト構成に別の意味の次元を付加している。また、節間に何の構造的関係も存在しない場合は結束性が唯一の節の結合要因でテキスト構成必須のものとなる。

次の指示要素においては、this/that、these/thoseや定冠詞のtheなどが対象となり、

外部照応と前方照応がある。this/thatは近接性に関わる話し手の視点を示すが、thatの方が概して包括的である。指示要素による照応で英語の場合の分析に大きく貢献するのが定冠詞のtheである。Hallidayによれば、このtheは、自己特定のな自己照応で、結束性分析に大きく寄与するが、日本語の場合には、theにあたる定冠詞が無い。

さらに、比較照応は対比の関係が作り出される。いま提示しているものが、それと同一か異なるか、似ているか似ていないか、等しいか等しくないか、それより多いか少ないかなどとされる。たとえば、the same, another, similar, different, as bigなどである。

## B. 省略と代用 (ellipsis and substitute)

特定の要素が省略されることは、それを可能にしている別の要素の存在が前提とされている。省略は意味に基づくものではなく、語彙と文法構造に基づくものであり、すなわち語結合における関係である。また代用はどこで省略が行われたか、省略された要素の文法的機能は何かを示す。

## C. 接続 (conjunction)

接続関係は本質的にはメッセージ間の関係、あるいはそれ自体がメッセージから構成された、より大きなメッセージの複合体間関係である。接続要素の形で表示される論理-意味的な関係は、他の多くの方法によっても具現される。また結束性を作り出す資源としての接続には観念的構成的メタ機能と対人的メタ機能の間の違いに対応している。

また、原因と結果が別々の文を成している非構造的な関係にある節の間を結束的に結びつけている。多くは接続付加詞や接続詞を節頭の主題の位置に置くことで明示的に示されるが、明示されないものもある。

## D. 語彙的結束性 (lexical cohesion)

先行する語彙項目に、何らかの関連のある語彙項目を使用することで結束が生まれる。その何らかの方法には、1. 繰り返し、2. 同義関係、3. コロケーションが挙げられる。

まず、繰り返しとは、たとえば、Agly met a bear. The bear was bulgy.の2つの文では2番目の文に出てきたbearが最初の文のbearを繰り返している。また語彙項目が全く同じ語彙ではなく、変化形も1つの語彙項目に属することから、関連した語彙、たとえばdine, dining, diner, dinnerなどの使用が挙げられる。

次の同義関係 (synonymy) とは先行する語とある意味で同義の語を使用することである。たとえばsound (音) とnois (騒音) やcavalry (騎兵隊) とhorses (馬) の間にあるような指示対象が同一で、ある種の同義関係がある場合に結束が成り立つ。また指示対象は同一ではないが、the quickset hedge (生垣) とthe hawthorn bush (サンザシの茂み) のように同じ語彙ではないが、hedgeとbushという同義語の間には結束が見いだせ、

このような上位下位関係hyponymy（一般的—特定の）と全体部分関係meronymy（全体的—部分的）のような同義関係の特定の変種であるものも含まれる。

さらに前掲の2種のような意味的關係ではなく、特定の関わりのある語彙の關係（共起の傾向）からも結束が生じる。たとえばsmokeとpipeやcoldとiceのように強い結びつきが感じられる語彙の使用などからも結束が生じる。

## IV. 調査

### A. 方法

本研究ではラジオの人生相談番組<sup>2</sup>をデータに助言内容が相談者を納得させるのに成功したか否かということを相談者の反応を見て判断し、分類を行う。相談者が助言内容について、たとえば「是非、そうしてみます。」「大変よくわかりました。」のようにことばで明確に助言内容に賛同している場合やまたは助言者の提案に「ことばをかけるとかですね。」などのように、助言者の発話にさらに相談者自らが助言内容に情報を付加する場合は相談者が助言者の提案する助言内容に同意している、すなわち、助言が成功した事例とみなされる。

しかしながら、助言内容が相談者に受け入れられない場合にも助言者は相談者に対する敬意を示すため、はっきりとは反対の感情を示さず、「はい、わかりました。」や「ありがとうございました。」などのように単なる丁寧な言動をとることもある。

### B. 語彙的結束性による分析の概要

次に成功談話か不成功談話かの2タイプによる分類をした上での特徴的なものを2事例ずつ合計4事例を挙げて結束例について分析を行う。

#### 1. 分析の方法

まず結束性を次の手順で図示する。

- ①対象となる助言談話を1枚の紙にまとめる。
- ②談話全体の中から、結束していると思われる節や文を選び、それらを線で結ぶ。その際に語彙的結束性は意味の連鎖であるので、節や文の意味に従って、同義のものを色別にする。
- ③助言談話のうち、助言セグメントを判りやすいように色で囲んでおく。

以上により仕上がった図は以下のような見方ができる。

#### 2. 結束性の図の見方

- ①談話は話し手・聞き手が相互に発話し合い進んでいくが、一つの主題が話し手・聞き手で相互に収斂している場合には、結束性を示す節や文が多く出現する。すなわち、図の中の線が多くなる。

- ② 談話の参加者（この場合は、相談者と回答者）が一つの主題に収斂している時は結束を表す節や文を相互に使用している。節や文を中心に考えると、発話者を特定せず両者の発話が線で結ばれる。
  - ③ 助言談話の成功にあつては、助言セグメント出現まで、相互の発話が一つの主題に収斂しながら何らかの連続していることが必要であり、談話の最初から助言セグメントまで線が繋がっている必要がある。
  - ④ 失敗談話の特徴は、成功談話の反対の傾向、すなわち談話が結束していないため、線が少ない。さらに、談話の主題が継続していないため、線が短い、あるいは助言セグメントまでいかずに途切れている。
  - ⑤ 全般的に結束の線が多く、長い方が助言談話の成功を表しているが、たまに相談者の結束の線が助言セグメントまでに2方向に分かれている場合がある。この場合は、相談者が、回答者の発話内容に満足していないことが多い。
- 以上をもとに、次は、実際の事例を分析してみよう。

### C. 分析結果

ここでは4つの事例を紹介する。そのうち2例は助言が成功した談話、そして2例は失敗した談話である。それではまず、成功助言談話（事例1と事例2）から見ていくことにしよう。

#### 1. 事例1

事例1は相談者が問題に対する見方を変更することに同意した理解・共感型の助言の例である。相談者の悩みの視点を変えることによって悩みを解消させるもので、回答者の説得が成功している事例である。

まずセグメントの連鎖をみると、a,b,c,d,eという順になっている。これは a.悩みの提示、b.現状の把握、c.問題の所在の発見、d.助言の提示、e.謝辞となっており、成功談話の基本的なパターンといえる。そして、これが何故成功談話なのかを、さらに結束性という概念で見してみる。

図1における助言セグメントは「じゃあ、最後のチャンス……」から始まり、「歩いていくことじゃないでしょうか」までである。この中で主題となっている語や節、「心の痛手」と「傷」、「二人で向き合つて」と「手を取り合つて」と「癒しあえる」と「歩いていく」などの3つの文は、語彙的結束性で結ばれている。

次に比喩的表現が強いが「最後のチャンス」は「私58歳、夫62歳」、「30数年の思い」、「肉体的にも経済的にもわかれられない」と関係がある。

また「今までの心の痛手、傷」は「うまくいってない、心の交流のできていない夫婦」、「二人の心の安定感がない」、「けんかになる」、「私をどうしてくれる」、「自分を責めている」、「心のマイナス貯金」、「孤独、寂しさ、自尊心、プライドもなく」、「心の傷を抱えて」





次にもう一つの成功事例の事例2を見てみよう。

## 2. 事例2

事例2は相談者が現状を変えるための行動を起こすことに同意—説得受容型の助言である。まずセグメントの連鎖を見ると、a,b,c,d,eという順になっている。これはa.悩みの提示、b.現状の把握、c.問題の所在の発見、d.助言の提示、e.謝辞となっており、成功談話の基本的なパターンといえる。

図2における助言セグメントは「ただですねえ、こうも思うんですね」から「基本的は平等であとは話し合いで……」の一連の文章である。

語彙的結束は「ゼロ」と「平等」、「法律上」と「財産相続」、「遺言状」、「共有名義」、「民法」、「904条の2」、「寄与分」、「財産上の給付」、「共同相続人」「代襲相続」、「法廷相続人」などである。

比喩的表現では「平等」と「土地の所有」、「財産」、「問題」と「その分」、「ゼロ」と「2分の一」、「色を付けて」と「相続財産（をあげる）」などがある。

「名義」は「その遺言」、「遺言状」と、「もったいない気持ち」は「女房に継がせる」、「気持ち（の上でいただきたい）」と、「(ちょっと)考える」と「下の始末」、「20数年一緒にしとる」「パートナーの寄与分」「切り出し方」と結束している。

これらの語句は各セグメントに広がっていて、事例1の図からも明らかなように各語の結束状況は、単に助言セグメント内に留まらず、広い範囲に分散している。それは、悩みの提示セグメント、現状把握セグメント、問題の所在セグメントなど、助言セグメントの前段のすべてに連関している。語彙的結束性が意味の連鎖を示す装置という観点からは、助言セグメント内に存在する語の関連する語が広くテキスト全体に広がっており、意味の連関が全文を通して存在していることがわかる。

一方、不成功助言談話はどうであろうか？ 事例3と事例4を見てみよう

## 3. 事例3

事例3は相談者が問題に対する見方を変更することに不同意の非受容型の助言で、回答者の相談者の悩みについての助言が成功していない例である。

まずセグメントの連鎖をみると、b,a,c,a,d,eという順になっており、これはb.現状の把握、a.悩みの提示、c.問題の所在の発見、a.悩みの提示、d.助言の提示、e.謝辞となっており、これは失敗談話の基本的なパターンといえる。

図3の助言セグメントは、「あのう、おかあさま一人ではなく……」から「……なすったらいかがですか？」までの一連の文章である。

語彙的結束は「職業」と「映画」、「目的」、「ほんやり」と「気力を失くして」、「フラフラして」、「アドバイス」と「進んだら」、「アドバイス」と「それ」である。

説得力ある助言談話パターンにおいては、先行詞は、談話全体に広い範囲で連関している場合が多い。すなわち、説得力ある談話においては、談話全体に一貫性があり、談話全







a.悩みの提示、d.助言の提示、c.問題の所在の発見、d.助言の提示、e.謝辞となっており、これも失敗談話の基本的なパターンといえるだろう。

図4の助言セグメントは、「そしたらお仲人さんに聞きにいかせるんですよ」からそれで一度やってみてください」までの一連の文章である。「金（のことより）」と「お金（を持たせてくれた）」、「270万」、「その金（をね）」という主題と、「このまま」につながる「お子さんを連れて実家にかえっちゃった」「2日置いたらうちへおくりかえした」という主題のつながりがない。

#### D. 事例のまとめ

語彙的結束性をもとにした事例分析の成功、不成功を見てきたが、この両者の違いは図を見れば明らかなように、成功助言談話においては、談話全体に結束が見られ、不成功助言談話においては、結束が談話全体に及んでいないことが判る。

語彙的結束性は、文法ルールに縛られることなく、談話の意味の連鎖を示すものであり、意味の連鎖は、節や文とその背景をなすコンテキストが連鎖していると考えられる。

またこれまでの研究で明らかになったように、助言談話は5つのセグメントから成り、そのセグメントの繋がり方によって、助言談話の成功・不成功が決まる。そして、各セグメントにはそれぞれにコンテキストがあり意味を生成している。

こうして考えてくると、語彙的結束性が談話全体に及ぶということは、この5つのセグメントの中の節や文（語はコンテキストや意味の観点からは単独で存在することはなく、節や文の形で存在する）との連関を示すものであり、成功助言談話に見られる語彙的結束性はまさに、この5つのセグメントの連鎖を証明するものに他ならないと考えられる。

## VII. おわりに

助言談話分析は、これまでの研究において、助言談話を構成するセグメント分類とその並び方を考察し、助言談話がこの部分においては制度性の高い談話であることが明らかになった。そして今回、談話の主題に踏み込み、これを結束性という概念で調べてみた。

その結果、助言談話を構成するセグメントとその並び順において、成功談話、不成功談話にある程度法則性があることが明らかになった。すなわち、結束性というツールは談話分析のユニバーサル分析方法の確立に向け、有効であることが確信できた。

今回は語彙的結束性分析により、談話をコンテキストのレベルから分析したが、今後は、さらに結束性の中でも、照応 (reference)、省略と代用 (ellipsis and substitute)、接続 (conjunction) まで広げることで分析の精度を高めたいと考えている。

〈注〉

- 1 状況コンテキスト (context of situation) と文化コンテキスト (context of culture) の両方を意味する。
- 2 調査のデータは2000年8月15日から2005年12月までに放送されたTBSラジオ「ズバリ快答! テレフォン身の上相談」人生相談番組を録音し、書き起こして分析を行った。

〈参考文献〉

- 阿部圭子 2001. 「『助言』のストラテジーの日米比較」『共立国際文化』第18号 59-70
- , 2004. 「助言のディスコース—『日米ラジオ人生相談番組』の事例研究—」『共立国際文化』第21号 31-44
- Abe, K. 2005. Analysis of advice discourse: Case studies of marriage counseling on radio programs in Japan and the United States. In Piotr Cap (ed.) *Pragmatics today*. Peter Lang, 219-233.
- , 2006. How may I help you-Advice by radio in Japan and the U.S. In Ana Maria Hornero et al. *Corpus linguistics*. Peter Lang, 79-92.
- , 2007. Constructing a methodology for the analysis of discourse: A comparative study of advice giving strategies in English and Japanese. Unpublished Ph. D. dissertation, Faculty of Letters, Keio University.
- Drew, Paul. and Marja-Leena Sorjonen. 1997. Institutional dialogue. In Teun A. Van Dijk (ed.). *Discourse as social interaction*. London: SAGE Publications. 92-118.
- Halliday, M.A.K. & Hasan, R. 1976: *Cohesion in English*. Longman.
- Halliday, M.A.K. 1994, 2004. *An introduction to functional grammar*. London: Edward Arnold.
- 『機能文法概説—ハリデー理論への誘い—』山口登、笈寿雄訳 くろしお出版
- Heritage, John and Sue Sefi. 1992. Dilemmas of advice: aspects of the delivery and reception of advice in interactions between health visitors and first-time mothers. In Paul Drew and John Heritage (eds.) *Talk at work*. Cambridge: Cambridge University Press. 359-417.
- Hymes, Dell. 1974. *Foundations in sociolinguistics: An ethnographic approach*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- 亀山恵 1999 「談話分析：整合性と結束性」『談話と文脈』亀山恵・片桐泰弘 (編) 岩波書店 93-121
- Maynard, Douglas W. 1992. On clinicians co-implicating recipients' perspective in the delivery of diagnostic news. In Paul Drew and John Heritage (eds.) *Talk at work*. Cambridge: Cambridge University Press. 331-358.

〈付録〉

分析に使用した4事例の相談の概要と相談者の反応は以下のものである。

1. 事例1は相談者が問題に対する見方を変更することに同意した理解・共感型の助言の例である。この事例は、相談者の悩みの視点を変えることによって悩みを解消させるもので、回答者の説得が成功している事例である。

a) 相談の概要

58歳の女性相談者の62歳の夫は仕事が長続きしないで転職ばかりしている。夫婦には32歳の息子がいるが結婚していない。相談者の妻はこんな男とこの先もずっと一緒にいるのが不安である。両親の関係を見ていて、息子にも影響が出ている。回答者の助言は夫を責めないで、気持ちを思いやることが重要である。お互いの心の傷を癒すようにする。夫に興味を持てば自ずと声を

かけられるし、話し合うことができる。二人とも若くはないし、残された時間は限られているのだから夫婦で共に歩んでいくようにしてはどうかという助言内容である。相談者は夫のことで悩んでいると相談を始めているが、回答者が質問を重ねていくうちに実は離婚を望んでいることを明かす。しかしながら、回答者は二人の関係はこのままにしておき、相談者の気持ちの持ちようを変えるように助言している。

b) 相談者の反応

助言の主な内容は二人の関係をやり直すことであり、その具体的な方法は相手に興味を持ち、またそれを相手に示すことであると回答者は提案する。助言の前半に対して相談者は「はい」と相づちを繰り返すだけだったが、後半にはいり、相談者の方から新情報を提示され、助言を受け入れ自分なりに納得しようとする態度が見られる。

2. 事例2は相談者が現状を変えるための行動を起こすことに同意—説得受容型の助言である。

a) 相談の概要

本助言談話は56歳男性からの相談で、20年くらい前から妻の母親と同居してきたが、妻が亡くなってからその男性が妻の母親の面倒を見てきた。最近になって妻の姉が財産が欲しいと言ってきたが、何の世話もしない妻の姉に財産を分けるのは納得がいかないというものである。助言の主題は相談者の義理の姉に対し、義母が亡くなった時にどのように財産分与を行なったら良いかについての話しのもって行き方についてで、回答者は義姉に、分与はゼロだが少しはお金を払うという切り出し方を勧めている。その助言に対し、相談者はアドバイスを大変参考にし、納得していることを示している。助言の内容は法律的な相続についてであり、それに対し相談者は満足している。

b) 相談者の反応

助言の内容自体は法律的な観点から回答者が法律的理解を述べ、さらに義理の姉に対する話しの切り出し型を助言する。それに対し、相談者は満足し、納得、感謝している。

相談者は初めは「ああ、はあ」と相づちを打っているが、回答者から問題解決の理由を提示されると「あ、そういう」と納得を示し始める。助言に対して相談者から「全く逆を考えるってことですね。」と自分の方から助言の内容についての新情報を加えることで納得を示し、それについて相談者からも「そうなんです。」と肯定の反応を受け、全面理解を示す。

3. 事例3は相談者が問題に対する見方を変更することに不同意の非受容型の助言で、相談者の悩みについての回答者の助言が成功していない例である。

a) 相談の概要

46歳の女性の子備校に通っていた19歳の長男が最近やる気を無くして、ぶらぶらしている。親としてどう接したらいいか? という相談への助言である。回答者は具体的なアドバイスをするように促すが相談者は納得していない。

b) 相談者の反応

相談者は「はい。」と相づちを打つ。回答者の「わかっていただけだと思う。」に対し、納得ではなく、「ああ、そうですか。」と答える。それに続いた回答者のアドバイスの繰り返しに対し、話しを終えるための「はい。わかりました。」と終了合図の発話となる。相談者からの新情報の提示はなく、回答者の発言に対する相づちとしての反応である。

4. 事例4は相談者が現状を変えるための行動を起こすことに不同意の助言で、問題所在の発見について、本当の問題の発見になっていない。説得コンテクストと問題がリンクしていない。助言成功へのコンテクストが構築されていないので、相談者の非納得になっている。

a) 相談の概要

63歳女性からの相談で2世帯住宅で一緒に住んでいる次男の嫁が常識が無い。次男も嫁も32歳で、結婚10年。9歳、6歳、1歳の3人の子供がいるが、相談者は離婚させたいと思っている。回答者からのアドバイスはとにかく仲人さんのところで話を聞いてもらうようにさせる。また2世帯住居から離れて、次男の家族だけで生活をさせてみてはどうかという助言に対して、相談者は納得していない。

b) 相談者の反応

相談者は「ええ、」「はい」を繰り返し、助言には「ええ、まあ」と答えるが、回答者の「お子さんがかわいそうですよ」の発話には激しく反応する。「子供のことを考えると身を裂かれる思いです。」回答者は同じ助言を繰り返すのみ。最後に相談者は納得はしないで、「参考にしてみます。」という発話で終了。



## A Study of Cohesion in Advice Giving Discourse

Keiko Abe

The purpose of this study is to examine the function and the role of language in communication exchanges between an advisor and an advice-seeker through an analysis of advice-giving discourse.

There are cases in which the advice seeker is satisfied with the advice and others where they are not satisfied with the advice. The analysis of whether advice seekers are satisfied or not includes 1) the rate of cohesion by A.K.Halliday (1976, 1994, 2004) of advice, 2) the discourse flow, which is the order of the segments in the whole discourse, and 3) the organization of the discourse of the advice seeker after having received the advice, and the responses of the advice seekers.

The present study focuses on cohesion. Observing the distribution of the advice of successful persuasion, the cohesion of vocabulary gathered in the segment of advice and the distribution that extended beyond that segment was spread widely in the whole discourse. Since the words of advice were related to the total vocabulary at various points throughout of the whole discourse, the advice itself had multi-layered structure. In other words the fact that the characteristics of the advice segment were repeated throughout the discourse strengthened the advice and caused the successful persuasion.

On the other hand, the rate of cohesion is lower in unsuccessful persuasion. Furthermore, the cohesion did not extend beyond the segment of advice. The data had cohesion within the discourse in a small area. Unsuccessful data had very few connections. The contents of advice did not relate to the whole discourse. That may be the cause for the lack of success in persuading the advice seekers. The effect of this was that the advice was simple and it did not have many foreshadowing words.

The difference of classification as to whether examples succeed or fail in persuading the advice seekers was more significant than the difference between the U.S. data and the Japanese data. The measure of the classification of advice discourse by whether the advice succeeds or fails could be a useful tool for classification.